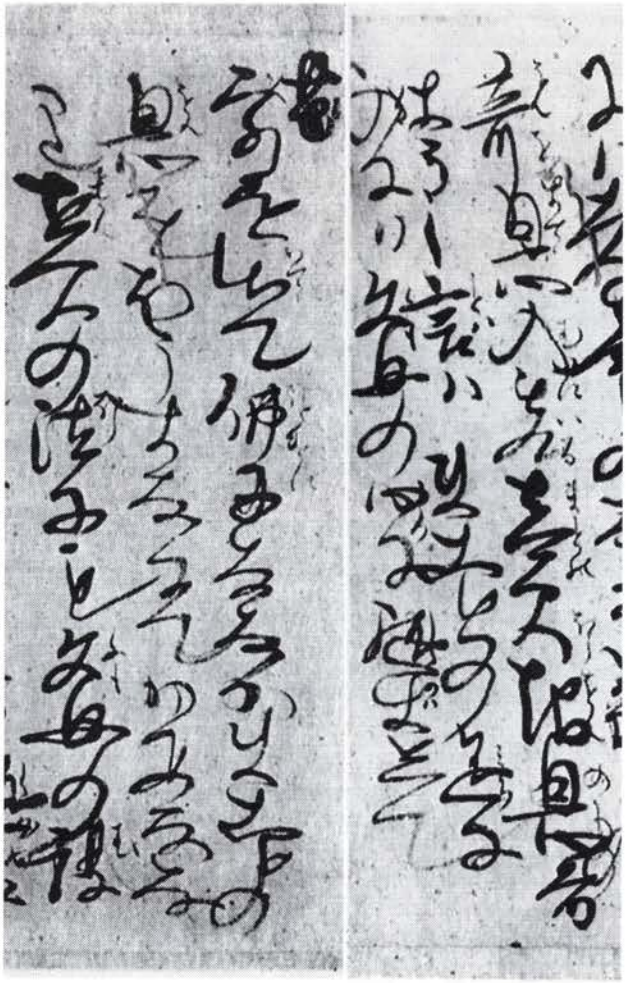
今月の御聖訓



（恩を棄てて無為に入るは真実報恩の者なり。）

奇（↓棄）レテ恩ヲ入ニルハ無為ニ真実報恩ノ者ナリ。

等云云。言は、まことの道に入には、父母の心に隨ずして家を出て仏になるが、まことの恩をほうずるにてはあるなり。【世間の法にも父母の謀】

【兄弟抄　全集一〇八五頁】

目　　次

今月の御聖訓

巻頭言……菅野憲道　1

「真の孝養について」……菅野憲道　2

御書と日興上人〔191〕……松田銘道　8

【紀行】「聖跡巡り〔3〕」……井元恵子　10

読書案内『しろがねの葉』……松田銘道　15

【山行記】「富士登山」……森　秀之　16

……20

九月の行事　長月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

護法ということ

菅野憲道

正信覚醒運動が始まった頃、若手ばかりだったこの運動の趣旨を、老僧先輩方にも説明して賛同していただくべく、同士で手わけして末寺を訪ねたことがある。学会が五十二年路線で、急にお寺や僧侶を敵視し宗門の存立すら不透明な頃だったから、すんなり賛成してもらえるものと思って状況説明しに回ったが、老僧方は様子見ばかりで積極的に支持をする人の少ないのは案外だった。それは学会ではすでに本部職員や総代を動員して末寺住職の懐柔もすすめ、親学会・反学会の色わけもすんでいた。　いまでも覚えているは、某師の『猊下の権威も両刃の剣だからなぁ』という返事と『君たち若いものには守る物がないから強気でいけるんだ』というもの。その後数年にして云わんとする意味はよく分かった。

法華経は一切衆生が等しく仏性を具えているという平等思想を持っている、ところが権力者は本質的に民衆を統制し、支配を強めることで権力強化に向かおうとするから、やがて個人の思想や宗教など人間の内面にまで強権的に干渉しようとする。ここに法難が起こる蓋然性（がいぜんせい）がある。法華経はこのところを良く予見しており、いかなる大難がおきても法を護れと説き、「寧ろ身命を喪うとも経を匿さざれ」と戒められている。

某師が法を護らず何を守ったか定かではないが、世間の人においてすら、職務に命を賭けている人がいる。原発事故の時でも多くの作業員が死と隣り合わせの作業を志望したという。彼らは何を守ったのか。それに引き比べ、阿部宗門が何を守ってきたのか、歴史はいずれ物語ってくれるだろう。

「王地に生まれたれば、身をば随へられたてまつるやうなりとも、心をば随へられたてまつるべからず。」

お講講話（要旨）

拝読御書　「兵衛志殿御返事」（全集一〇九〇頁）

真の孝養について

菅野憲道

《心を磨く》

日本では、お盆やお彼岸で先祖を供養する慣習を当たり前のように思っておりますが、広く世界を見わたしますと、父母などの肉親が亡くなった後々までもこれを供養したり法事を行ったりするのは、仏教圏だけのようです。

キリスト教やイスラム教徒にも、当然先祖や父母はいるのでしょうが、先祖供養や法事のようなことをしないのは、その背景にある宗教の教義や生命観が違うからで、肉親が亡くなるとお葬式はするのでしょうが、その後は一般的に法事やお墓参りなどはほとんどしません。こういうところにも国民性や人間性の違いが出てくる要因があるようです。

日本では、儒教の影響もあって伝統的に先祖を敬い父母に孝養を尽くして恩を報ずることは、基本的な「人の道」と受けとめられてきました。いつの時代でも親孝行は人間の美徳として讃えられて、各地の藩主が領内の孝子を探し出して表彰したり、藩校や私塾・寺子屋などでは久しく「孝経」や「二十四孝」が社会教育の教科書として用いられて人格形成に資されてきたものですが、そういう伝統も近代化以降はだんだんあやしくなってきました。

昔はどこの学校にもあった二宮金次郎像

とりわけ戦後教育においては、二宮金次郎の銅像が撤去されたことに象徴されるように、道徳的なことや、精神的な価値については封建的弊風などといって否定的にとらえられ、個人の自由意志や金銭的価値ばかりが強調されるようになってきたようです。

本来、人間が生きて行動する背後には、必ず何らかの価値観や想像力、感性や意志、自己認識や美意識などがあるものです。

これらが種々の縁によって自我意識の中に一定のイメージになって浮かんでくると、その多くは泡沫(うたかた)にも等しい妄想ですから、すぐに消えてしまいますが、時には想念を現実化する欲求も生じて活動が始まるわけです。

人の心には、ある時には他者と争って、「倍返し」で思い知らせてやろうというような復讐心が生まれたり、車椅子の人を通りすがりの人と呼吸を合わせて駅の階段を担ぎあげるような親切心もあれば、落とし物を探しあぐねて困っている人を「関係無い」と自分に言い訳して通りすぎたり、死刑囚の手記を読んで同情心から思わず涙をこぼしたり、韓流ドラマの俳優に恋したりとか、人の心の世界は時々刻々、天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄の法界の自覚もないままに変転するものです。

しかも自分の体臭は自分では容易に気がつかないように、自分の心が邪悪になっても、これを自覚して改めることは困難です。これは我慢偏執の心には、自分もつねに過ちを犯すものだという発想がなく、むしろ自己防衛の心理からすぐに自己正当化の理屈付けに向うため、過ちを認めて反省するような流れにはなりません。まして自身の心の中の様相までなかなか自覚できないものです。

仏教では心の毒として貪欲・瞋恚・愚痴の三つをあげております。

濁った愚痴の心では悪事を犯しそうな自身を止め、それを戒める強い意志は働かないし、貪欲の心が起これば「欲に目がくらむ」と言い習わすように正邪、善悪、真偽などの判断が後回しになります。また自己愛が強いと自己を甘やかして慢心し、その慢心が他から傷つけられると、瞋(いか)って衝動的に暴力や破壊行動をとります。心が煩悩で覆われるがゆえに、白を黒と見紛う「顛倒見」におちいるのです。

したがって分別功徳品などで法華経の功徳を説いて「六根清浄」と示されるように、妙法蓮華経を一念に受持し、信じて唱えることが我が身は妙法蓮華経の当体として、事の一念三千の法界に遍満し、一心清浄の果報を得るというものです。

そこで「一生成仏抄」に、

「一念無明の迷信は磨かざる鏡なるべし、是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし。深く信心を発して日夜朝暮に又懈(おこた)らず磨くべし。

何様にしてか磨くべき。

只 南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」

とあります。すなわちこの寿量文底の三大秘法の御本尊を信じて唱題することが、無明惑で覆われた凡夫の一念心を磨いて明鏡の如き法性真如の仏心となると仰せられております。

《法華経は内典の孝経》

この孝養のことは、もともと東洋には恩という考え方があって、自分たちを生きて今あらしめているもの、生かしめているもの、陰となって支えてくれているものを恩というのですが、恩という字は、原因の「因」と「心」という字でできていて、自分自身の存在の原因を探っていけば、必ず父母・師匠・国恩や三宝の恩、また一切衆生や大自然の恩恵とか、いろいろな恩

に思い当たるのであって、それを仏教では四恩といい、御書にも「報恩抄」「四恩抄」等に示されていますが、その恩を報ずることが人の道だというのです。

これについても近年は外国から研修生として、いろいろな職場に入って活動しているようですが、日本人の感覚と違うのは雇い主が一所懸命世話をして一人前に育てようと思っても、ある日突然いなくなったり、他から少しでも高い報酬を提示されると、親身に世話をされていながら、すぐにそっちの方へ行ってしまうという具合で、およそ恩を知らないとような話を耳にすることがあります。

日本人も、近年の欧米化で契約の意識が入ってきたようで、あまり恩ということがいわれなくなっていますが、それでもまだ社会の隅々にまで人間としての心の通い合う関係が残っていることは、日本の国では実には千年も二千年も前から、恩とか忠孝とか、誠意という「心こそ大切」にされてきた文化があったからだと思います。

大聖人も「開目抄」の冒頭で、

「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂主師親これなり」（全集一八六頁）

と、人生にとって大切で尊敬しなければならないのが主・師・親の三徳だと仰せられ、とりわけ親の孝養はもっとも大切であるといわれ、また、「父母を知らざれば**禽獣に同ず**」（同）と、父母を知らなければ鳥や獣と一緒で、父母から生まれていながら、自分の力だけで生きてきたと思っているのは、自分のことさえ分かっていない愚かなことです。

また、一般的にふつうの倫理観として親に孝養を尽くすことは、多く見受けられるのですが、真の孝養には足りないとして、次のようにも説かれております。

「儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無実なり。外道は過未をしれども父母を扶くる道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名はあるべけれ。しかれども法華経已前等の大小乗の経宗は、自身の得道猶かなひがたし。何に況や父母をや。但文のみあて義なし。今法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏も顕はれ、達多の悪人成仏の時慈父の成仏も顕はるれ。此の経は内典の孝経なり」（全集二二三頁）

大聖人ご生誕の地、小湊（鯛ノ浦）

といわれ、法華経は「内典の孝経」であり、真実の孝養は内典（仏教）の中でも、法華経こそ一切衆生の成仏が説かれて、親の後生をも救う唯一の教えなのです。これをまた、「刑部左衛門尉女房御返事」には、

「父母に御孝養の意あらん人々は法華経を贈り給ふべし。教主釈尊の父母の御孝養には法華経を贈り給ひて候」（全集一四〇一頁）

と、たとえ故父母がこの信心ができず、成仏ができなかったと

しても、その子孫が法華経をもって供養したならば必ず亡くなった両親も成仏できると仰せですから、これほど親孝行なことはないのです。

世法でいえば、生きている間にいくら立派に親孝行を尽くしたとしても、亡くなった後々までは救うことができないのですが、この法華経を信じて持つことは、そのまま父母を供養することに通じており、亡くなった後々まで、現在も未来も現当二世にわたって親孝行を尽くすことができるのですから、法華経こそ本当の意味で親孝行のできる教えであると、「此の経（法華経）は内典の孝経なり」と仰せなのです。

《自身の変化につながる孝養の心》

そしてそのことは、親を大切にしようとか、亡くなった父母を供養しようとする心をおこすことは、そのまま自身が大きく変化する一つの契機になるのです。

普段は、ほとんどの場合、自己中心的に生きていて、放っておけばだんだん利己主義になって、エゴの命が強くなることから貪欲、瞋恚、愚癡の心も増してくるのですが、父母のことを思う心や感謝する心が起こった時に、意識の中に変化が生じているものです。それは、自分が母からの分身としてこの世に生を受けたもので、一人の身が二人になったわけですから、二而不二、母子一体の命でもあることを心のどこかで再認識させられるわけです。

また子供のことは思っても、先立った親のことを思うことは少ないのですが、それを父母や先祖を供養する心を起こす時には、当然その親も自分のことという思いになるのです。

さらに、自分と他人の境界を、自分の身体や意識の二つで境界を引いてしまうのですが、親を供養する心を起こす時には、親のことも他人事ではなく自分のことになって、そのことから自分の家族とか身内、父母、子孫も含め、自分の範囲が広がって、さらに法華経の信仰をしていくと、**「一切衆生は皆父母なり」**（「法蓮抄」全集一〇四六頁）という御書があるように、我われの命は当然人類の大きな命の流れの中で、何十万年も前から次々と遺伝子が受け継がれ展開して今の我われに繋がっているのですから、大きな河の流れのように命の流れは一切衆生と一体不二であることになる。別の見方をすれば地・水・火・風・空の五大は自身が法界全体そのもの、身土不二の妙法そのものとなり、自分というものがだんだん同心円的に広がっていって、法界全体を自分の生命と捉えることができるようになるのです。

またこのような生命観に立てば、自ずから生死の姿も常住の現象であり、春になれば花が咲いて、秋になれば木の葉が散るということを繰り返していながら、少しも本質は変わらないで、ずっと命が受け継がれていく……現に我われの身体も各部位では個々の細胞にも寿命があり、生まれてから数ヶ月で死滅するのですが、また次々に細胞分裂し、再生し、生まれては死滅しながら寿命を保っているのです。このような諸法の真実の相を自然に感得するのです。

そうすると、今まで自己中心的に目に見えるものしか信じないで今だけという考えで生きている人が、自分の生・老・病・死の局面に遭遇して、断絶や虚無と見えた死にうろたえたり不安

になったり、恐怖心を覚えるような状況から、まったく変わることができるのです。

多くの生命が朝めざめて、昼に活動して、夜にまた眠りにつくのと同じように自分の一生を捉えることができ、所謂生・老・病・死がこの法界の成住壞空、生々流転の働きとまったく同じことであって、自分だけが特別に死（絶無）という目に遭っているのではなく、生まれてきた以上は必ず生・老・病・死を経て、やがて法界に帰ることは、万物に同じ条件であって、誰もが生きている以上はその理法をたどっていくのですから、天地がひっくり返ったように嘆き苦しむことはないと思うのです。

子供も小さな間は、母親の姿が見えないとすぐに不安になって泣きべそをかいたりするのですが、大きくなると多少離れていても、いることが分かっていれば安心しています。直接見えなくとも安心しています。

このことは、いとおしい大事な人が亡くなっても、必ず事の一念三千の御本尊の中にいると信ずれば、何も心配はいらないのです。どこにいったか迷うことは、不安を生じるのです。

故人と一緒に生きているという信仰があれば、この世の終わりというほど嘆き悲しむこともないと思うのです。我われが生死を克服する道は、法華経をもって父母を供養する所にも開けているのだと思うのです。

ともかく法華経をもって父母を供養することは、自分自身が大きく変わっていくからこそできるようになるのだと思います。

《真実の報恩とは、仏恩報謝と無縁の慈悲》

ところで一般的に孝養といえば、何ごとも親の意に従い、親の云うことをきくことと理解する向きも多いのですが、大聖人の教えはけしてそうではありません。それは御書をご覧になって戴ければ分かるのですが、「たとえ親や主君や師匠であっても、法に外れ、間違っている時はこれに随わず、諫めるのが真の孝子・忠臣・弟子である」というものです。

たとえば「王舎城事」には、

「ただし法華経のかたきになりぬれば、父母・国主の事をも用ゐざるが孝養ともなり、国の恩を報ずるにて候。……日本国に国主・父母・師匠の申す事を用ゐずして、ついに天のたすけをかほる人は、日蓮より外は出だしがたくや候はんずらん」（全集一一三八頁）

とあり、たとえ国主であっても師匠であっても父母であっても、法華経の説くところに背いていれば、それを用いないのが本当の孝養だとおせられます。

このことの背景には、仏教の基本精神の「依法不依人」ということがあります。それは「開目抄」・「報恩抄」はじめ多くの御書に示されております。釈尊入滅に当たり、滅後末法において仏法を信じ、学び行ずる際に、何をよりどころとしたら良いかという弟子の質問に対して答えられたもので、涅槃経などに、「法の四依」として明確に定められております。すなわち、

依法不依人（法に依って人に依らざれ）
依義不依語（義に依って語に依らざれ）
依智不依識（智に依って識に依らざれ）
依了義経不依不了義経（了義経に依って不了義経に依らざれ）

というものです。依法の「法」とは法華経の文底の妙法を意味します。同じく「了義経」も法華経を指します。この妙法を受持するのに最尊最勝の依りどころは法なのです。それも具体的には「法華経」と「日蓮大聖人御書」の御意なのです。

これを大聖人の「依法不依人」のご精神が日興上人に受け継がれたことは身延離山における諸文書を拝すれば疑う余地はありません。況や日興上人「遺誡置文」の、

「一、時の貫首たりと雖も仏法に相違して己義を構えば、これを用いべからざる事」

との制戒を拝する時、現宗門は「依法不依人」の精神を捨閉閣抛して、何を相承したのか。

今の大石寺や創価学会を一言で評せば貫首や池田大作を本師として絶対化し、「依人不依法」の逆立ち教学となってしまっているのですから気の毒なことです。

名聞利養の権化のような人物を崇拝すればするほど、「還着於本人」で、教団も構成員も振り回されて、取り返しのつかない禍根を残してきたのでした。

〝御法主上人猊下に信伏随従〟などとは、よくぞいったもの、これまで度々繰り返してきた相承をめぐる争いから少しは教訓を学んでからいって貰いたいものです。

マンセー親衛隊かチルドレンか、はたまた紅衛兵かは知らないが、余人には知られぬはずの御相承。しかも誰もいない所での内相承とか。この誰も知らないはずの御相承を〝あった。あった〟と口を揃えるのも尋常でない。誰もいないところで本音を聞いてみたいものです。

ともあれ、

「法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊し」（文句）

といって、人の尊貴は所持の法に依るのですから、常に法が人に優先するのです。

池上兄弟の邸跡に建立された池上本門寺（総門）

「兄弟抄」には、

「恩を棄てて無為に入るは真実報恩の者なり等云々。言は、まことの道に入るには、父母の心に随はずして家を出でて仏になるが、まことの恩をほうずるにてはあるなり」（全集一〇八五頁）

とあって、本当の意味で仏法上の報恩とは、世話になった人に金品を贈るようなギブアンドテイクの貸し借りではありません。当事者間のグループ内だけでやりとりするような矮小化された精神でもありません。

「白烏の恩を黒烏に報ぜよ」（「祈祷抄」全集一三五二頁）という有名な御妙判があります。恩を報ずることは、父母、師匠、国主の心に従うのではなく、正法を守って久住せしめて父母並びに無縁の衆生をも導くことが真の報恩なのです。

仏法僧の三宝の恩も、法を護持し随力弘通する所に仏恩報謝の基本があります。普遍性と永遠性を具えた報恩行なのです。

南無妙法蓮華経　（了）

【御書と日興上人（一九一）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二五）

松田銘道

前回は、『本尊問答抄』の法本尊に関する一文について、大黒喜道氏が「宗祖教学体系における三大秘法の位置づけについて」との論文に、宗祖がボロン字花押を「大曼陀羅本尊に大きく認められた内意」を検証してきました。今回も大黒氏の論文から、宗祖晩年の考察についてみていきます。同論の「補説」では、

「宗祖大聖人のご一生はまことに波瀾万丈であって、特に文永八年の竜口法難已後の十一年間はご生活もそうであったが、それ以上に思想的な活動面における展開と言うか、その揺れの大きさはこれまでの私たちの想像以上のものがあったように思われる。つまり私たちは、宗祖は文永八年の竜口で発迹顕本され、一種の仏の境界に入られたのだから、それ以後は不動の境地にあられたと思いがちであり（中略）これまでの数多くの研究成果はまことに貴重であり、現在の私たちはその学恩を確実に受けていることは間違いないが、しかし、これまでのある意味では平面的と言うか、静止画的な研究では右に述べたような宗祖晩年の激しい動きを把えることはなかなか難しいように見えるのである（㊟関連図参照）。そして、これからはより細かい見方、たとえば一年単位とか数ケ月単位でその思想的な動きを見ていくという作業をして行かなければ、宗祖の晩年の信仰世界の実際はなかなか見えてこないのではないか、とも思われるのである。」

と、宗祖晩年の考察について新たな提案をしています。すなわち、

①従来の研究では、竜口法難以後の宗祖は不動の境智にあった、とされてきた。
②①の静止画面的な研究では、宗祖の晩年の信仰世界の実際は見えてこない。
③②は、一年単位とか数ケ月単位でその思想的な動きを見ていく作業が必要。

以上のように、③の方法から、②の信仰世界の実際を検証することを提言しています。

①の現状については、たとえば、『日蓮大聖人正伝』（大石寺刊・昭和五十六年十月十三日）では、

「竜の口の法難は、大聖人の一代において最も重大な意義をもっている。それは大聖人がこの法難において、凡夫上行日蓮の身より久遠元初自受用報身如来、すなわち三世諸仏の根源たる久遠名字の本仏として、その本身を開顕されたからである。このように仮りの姿を払って本地の身を顕わすことを発迹顕本という。このことについて大聖人は『開目抄』に『日蓮といゐし者は、去年（こぞのとし）九月十二日子丑（ねうし）の時に頸はねられぬ。此れは魂魄佐土の国にいたりて、（中略）みん人いかにをぢぬらむ』（全二二三）と明されて

いる。この魂魄とは、凡夫身のそれではなく、上行日蓮の本地たる久遠元初の自受用身としての魂魄である。」

また、『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院・昭和五十六年十月）では「魂魄」との項目を設け、

「古来日蓮宗では日蓮聖人が佐渡流罪中に著した『開目抄』を人開顕の書と称している。人開顕とは『法を弘める人』を開示顕現するということで、日蓮聖人自身を法華経の文上に乗せて解明したのがこの『開目抄』であった。

（中略）この書において聖人は自らこそが法華経に予言された末法の唱導師本化地涌の菩薩であるとの自覚を顕説し、凡夫日蓮から聖者日蓮へと飛躍している。」

との見解を示しています。

このように、①の「不動の境智」を、日蓮正宗では「久遠元初自受用報身如来（＝久遠名字の本仏）」との用語で示し、日蓮宗では「聖者日蓮（＝地涌の菩薩）」と規定しています。しかし、日蓮正宗で用いている「久遠元初の自受用身」、「久遠名字」との用語は、宗祖の真撰書や門下上代の写本が伝わる確実な御書には用例が無く、後世に作成された相伝書にのみ用例があります。たとえば、『本因妙抄』には、

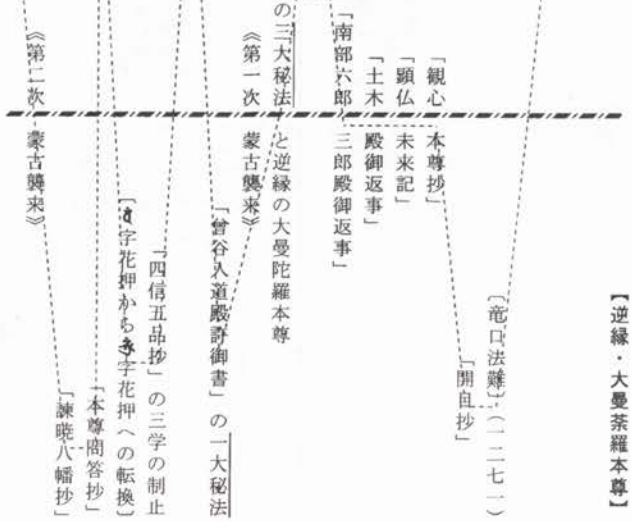
「彼れは応仏昇進の自受用報身の一念三千・一心三観、此れは久遠元初の自受用報身、無作本有の妙法を直に唱ふ。」

と、宗祖が「彼（＝釈尊）」の「応仏昇進」とは異なる本仏であることを示す用語に「久遠元初」を用いています。また、『百六箇抄』には、

「十、不渡余行の法華経の本迹　義理上に同じ。直達の法華は本門、唱ふる釈迦は迹なり。今日蓮が修行は久遠名字の振舞ひに介爾計りも違はざるなり。」

と、「釈尊（＝迹）」と「宗祖（＝本）」の勝劣を示す用語に「久遠名字」を用いています。

このように、①の「不動の境智」を、日蓮正宗では後世に作成された相伝書から示し、日蓮宗が御書に基づいて示した「不動の境智」＝「地涌の菩薩」との自覚を、竜口法難以前の「凡夫上行日蓮」と位置づけています。



大黒喜道氏が「宗祖教学体系における三大秘法の位置づけについて」（『興風』27号）にて、宗祖が竜口法難以後、「一大秘法（＝大曼陀羅本尊）」を逆縁世界の本尊と規定されたことを示した図。

【紀行】

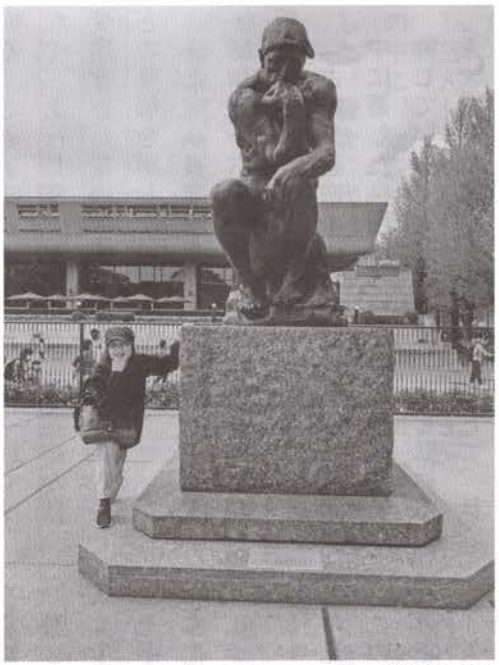
聖跡巡り〔3〕

槻木地区　井元恵子

五日目。午前中は真理さんの行きたい上野にある国立西洋美術館です。

この建物と園地は、ル・コルビュジエの建築作品として、二〇一六年に世界文化遺産に登録されたそうです。芸術に興味の無い私でもわかるモネの「睡蓮」は、私の身長くらいもあるサイズで、こんなに大きいものだとは思いもしませんでした。

ルノワール、ゴッホ、ピカソの絵画や、ロダンの『考える人』を始め、作品も沢山あってびっくりしました。中でも、私はルノワールが好きだな、と思いました。



ロダン「考える人」の横で（国立西洋美術館）

午後は、私の行きたかった藤沢と鎌倉へ行きました。前にも連れて行っていただいたのですが、もう一度行きたかったのです。

先ずは、龍口寺です。

階段を上がっていくと門があるのですが、その手前の階段下に龍口刑場跡があります。現在は、目の前には道路や江ノ電が走っていますが、その当時の一帯は、海が広がっていたそうです。

門をくぐりまっすぐ行くと本堂ですが、左手に行くと「御霊窟」の看板がありました。この洞窟は、幕府に捕らえられた大聖人様が処刑までの間、一時的に幽閉されていたと伝えられる洞窟（土牢）です。割と体格のいいといわれている大聖

龍口刑場跡（龍口寺）

人様には、少し狭く感じるのではないか、と思える大きさの洞窟でした。

本堂に入ると、右側奥にカラフルな六老僧の座像がありました。そこにいたお若い僧侶に、「土籠御書」に出てくる土牢がどこにあるかを尋ねると、先ほどの大聖人様が幽閉されていた土牢を教えられたのですが、「えっ？」と思ってもう一度尋ねると、分からないとの返答。

改めて、六老僧の座像のところをよく見ると、「光則寺」と書いてありましたので、光則寺へいくことに。でも、何故にわからないのかなあと、不思議な気持ちになりました。

光則寺にある土牢

光則寺は、御書にも名前のある、宿屋入道、宿屋左衛門尉光則の屋敷跡です。宿屋左衛門尉光則は寺社奉行で、大聖人様の「立正安国論」や御書状を、当時の権力者の北条時頼に渡す、取り次ぎを担当していました。

光則は、大聖人様との関わりのなかで、大聖人様の思想に感化され、大聖人様が助命されると、深く大聖人様に帰依するようになり、自邸を寄進して日朗師を開山として、光則寺を建立したとあります。

本堂の裏山を少し上ると、山肌の中腹に大きな洞窟がありました。そこが「土籠御書」に出てくる土牢です。何人でも入れる様な、立ってウロウロできるくらいの土牢で、大聖人様の入られた土牢とは、大きさが全然違いました。側に「土籠御書」の石碑がありました。

光則寺は、鎌倉で有数の花寺として知られ、樹齢二百年のカイドウの古木や、二百種類のアジサイなど、四季折々の花が境内を彩っているみたいです。

手入れをされている女性の方がいらっしゃり、真理さんの植物の質問に、丁寧に答えてくれていました。

次は、四条金吾邸跡の収玄寺です。

小さなお寺で、門をくぐると直ぐに「四条金吾邸址」と書かれた、大きな石碑が目に飛び込んできます。その一角にカフェがあり、トイレも借りたかったので、珈琲をいただくことに。

カフェの方は、一人で切り盛りして忙しそうでしたが、その日の夜に泊まるところや、美味しいご飯の所を親切に教えてくださいました。

次は、大聖人様が龍口刑場に向かう前に檄を飛ばされた、鶴岡八幡宮の鳥居の前を通り、辻説法跡の場所へ。

小さな場所で、ちょっとだけ寄りたかっただけなので、道路の隅に車を停めたかったのですが、道が狭く、往来も多いので、三十分三百円の駐車場に停めまし

辻説法跡

た。

三メートル四方くらいでしょうか、その中に、辻説法跡の石碑と看板がありました。鎌倉時代、この辺りは武士の屋敷と商家町が混在した地域と考えられ、毎日のようにこの辺りを訪れて、法華経の功徳を説く辻説法を行ったと伝えられています。

辻説法の場所の隣には、お堂の様なものが建っていて、ガラス越しに覗くと、怖い顔の大聖人様の像が建っていました。やめてほしいと思いました。

十分もかからず駐車場に戻ると、駐車場の方が、「えっ、もう戻ってきたの。じゃあ百円でいいよ」と言っていただき、その気持ちが嬉しかったです。

もう夕暮れになってしまったので、松葉が谷草庵跡には行かず、真理さんが探してくれた龍口寺近くの民宿に泊まりました。朝食に出たあじの干物が、とても美味しかったです。

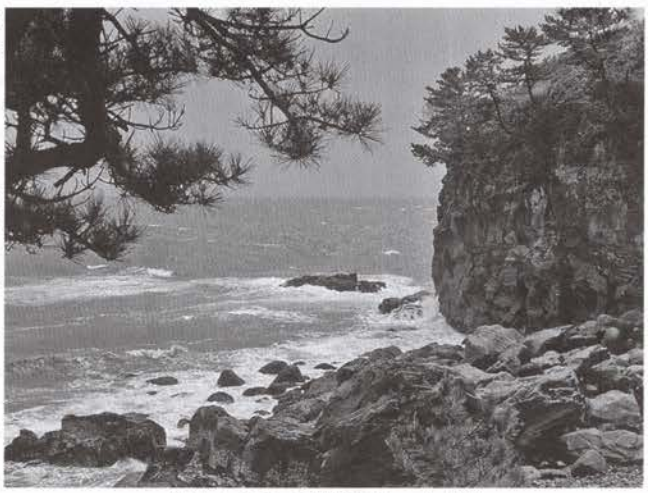
最終日の六日目は、伊豆流罪の地へ行きました。

先ずは、日蓮崎の俎岩（まないた）へ。

当日は、私の調子が悪く終日、真理さんに運転をお願いしました。小雨が降ったり風があって、運転し辛かったと思います。申し訳ない。

俎岩へ向かうつもりが、レンタカーのナビの通りに行くと、全然違う所に案内されてしまいましたので、スマホのグーグルマップを使って改めて向かいます。

どんどん海に近くなってきた所に、蓮着寺という、流罪の際に大聖人様が流罪の地に着かれたところ、ということでしょうか、お寺がありました。大聖人様の関わりのある所は、全てお寺になっているようです。


海中に浮かぶ俎（まないた）岩

蓮着寺には特に用がないので、お寺の境内を通り抜け日蓮崎へ。少し歩くと海へ出ました。崖がそそり立つ下に、俎岩がありました。

割と海岸から近いので、海育ちの大聖

人様なら泳げたんではないかと、二人で話しました。俎岩は岩がゴツゴツしている所なので、満ち潮の時は波しぶきがあって、大聖人様は濡れられたのではないかと思います。ただ満ち潮の時でないと、船守弥三郎は船で俎岩まで近づけなかったのではないか、とも想像できますよね。鎌倉時代当時の地形がわからないので、何ともいえません。

次に、蓮慶寺です。

蓮慶寺は、上ノ原弥三郎（船守弥三郎）の屋敷跡です。俎岩から国道まで上がって車に戻り、眼下に海を見ながらカーブを少しずつ下ると、途中の道路沿いに、崖にくっついた様な本堂がいきなり現れます。その本堂を囲むように崖とも山とも見える斜面に沿って、沢山のお墓が海を見下ろす様にありました。

蓮慶寺

お寺は、海からは徒歩では割と遠く、漁師なのにここに家があって、毎日海まで歩いてたのかと思うと、現代に生き、車で移動するのが当たり前の私の足腰は、弱って当然だな、と思いました。

次は、お岩屋祖師堂です。ここは、船守弥三郎が漁師の道具を置いていた小屋です。蓮慶寺から約二百メートル離れています。何だ二百メートルかとお思いでしょうが、直線は崖です。崖を二百メートル、毎日降りたり登ったりするのです。考えただけで息が切れそうです。

そこの看板には、

《夕刻の漁の帰りに大聖人様をお助けし、家（蓮慶寺）へお連れしたが、地頭の詮議が厳しいため、日頃漁具を入れ置く岩屋の奥深く聖人を匿われた、伊豆法難の霊跡です》

とありました。

お岩屋祖師堂

住宅の一角にあり、石垣の上に小屋はありました。小屋といっても、今風になっており、中は賽銭箱などが置いてありました。当時は、海がもっと小屋の近くまで来ていたのではないかと思います。

俎岩から割と車で走りましたが、舟であれば近いと思います。大聖人様は、こ

の小屋で約一ヶ月過ごしました。

次は、仏現寺です。ここは、大聖人様が流罪の地で三年の時を過ごされた、地頭の伊東祐光より与えられた毘沙門堂の草庵跡です。

そこの看板には、

《御草庵旧跡・日蓮聖人は伊東配流の三箇年を、伊東家鬼門除けの毘沙門堂にて、法華経を読誦修行され、「四恩抄」「教機時国抄」等を著述せられ、法華経の経文が事実となり、聖人の身の上に現れたので、始めて此の地にて「法華経の行者日蓮」を自覚宣言された。弘長三年二月、御年四十二歳の時、赦免され鎌倉に帰られた。この草庵跡が仏現寺で、聖人四度の大難中最初の法難霊跡であります》

と書かれていました。

この大聖人様が流罪の地にあった時、地頭の伊東祐光が奇病にかかり、大聖人様に祈祷を懇願して治ったことから、その起死回生のお礼に祐光は、伊東家重宝・海中出現の立像釈迦仏を贈られた、とも書かれていました。伊東祐光はこの後、大聖人様に帰依しています。

伊東祐光より与えられた毘沙門堂草庵跡（仏現寺）

車で入られる大きな山門は、近年作られたもののようですが、旧山門は一八三一年に作られ、人しか歩けない階段を下りたところにあります。

旧山門から入ると、真っ直ぐに毘沙門堂御草庵に行けるようになってたみたいですが、車で境内に入ったので、残念ながらわからずじまいでした。境内は、他に本堂や常経殿、多宝塔などがあります。

今回の聖跡巡りは、これで終わりですが、この日は伊豆から少し引き返して、熱海に泊まって、次の日に帰阪しました。

私はこの旅行記を書くにあたって、普段読み慣れない御書を、あっち読みこっち読みしながら進めてまいりました。なかなか進まず、二十五日もかかりました（何日も書かないこともありました）。ただ、普段なかなか難しい御書を読みにくい私にとって、前に行った佐渡や安房、また、今回の身延、富士、千葉、東京、伊豆と訪れることによって、少しですが御書を身近に感じることが出来ました。

いつも快く一緒に行ってくれる真理さんには、本当に感謝しています。私の拙い知識でも楽しく、そして大聖人様、日興上人様を、身近に感じることが出来ました。今度は私が、いつか聖跡をみなさまに案内できるかもしれない、と思ったりもしています。

長文をご覧くださり、ありがとうございました。合掌。

著者は二〇〇八年、『魚神』で作家デビューし、第三十七回泉鏡花文学賞を受賞。その後、十三年に「あとかた」で第二十回島清恋愛文学賞、十四年に「男ともだち」で第一回新井賞、二十一年に「透明な夜の香り」で第六回渡辺淳一文学賞を受賞している。

そして、長年の構想を経て、はじめて時代小説に挑戦した本書では、第一六八回直木賞を受賞した

小説の舞台は、二〇〇七年に世界遺産に登録された石見銀山。家族のもとを離れ、銀山に辿り着いた少女・ウメの一生を通して、男社会の中で、旺盛な生命力でしたたかに生き抜く姿を描いている。

直木賞受賞の翌月、NHKラジオ「著者からの手紙」に出演した著者は、司会者から、

「物語は『銀山のおなごは三たび夫を持つ』と語られるように、石見銀山での過酷な暮らしと宿命を背負ったウメが、もがき、生き延びようとするさまが描かれています。ウメは幼い頃から銀掘、銀の採掘をする人になりたいと念じて成長しますが、『おなご』であることからその夢を実現することができません。千早さんはウメの人生を描くことで、どんなことを表現しようと思われたんですか。」

との問いかけに対し、

「書くときに私はいつも疑問から入ることが多いんですね。今回は石見銀山に行ったときに、みんな穴の中に毎日入って、掘って、生きていく。病気にもなるし、すごくつらいだろうなと思って、『そこまでしてなんで生きるんだろう』というのはすごく考えちゃったんです。私だったら、逃げちゃうっていうか。そこからの疑問に、私は書くことでしか見つけられないので、長い長い物語を書いて、自分の中の疑問に向き合いたいと思って書きました。」

と答えている。

真っ暗闇の中に入り込んでいく「銀掘」は男のみが請け負うが、短命を強いられる過酷な仕事である。著者は取材を通して、命を削ってまでなぜ暗闇に向うのか、そのことに疑問を抱く。その疑問から、短命の夫を失いつつも次の男を受け入れていく一人の女性の目を通して、男社会の壮絶な生き様を描いた作品が生まれた。

読書案内

松田銘道

千早　茜　著

『しろがねの葉』

新潮社

定価一八七〇円

【山行記】

富士登山

（七月十九日～二十日）

大阪地区　森　秀之

六月に槍ヶ岳を登って、ちょっとした高山病になったことと、帰って来てからの筋肉痛が四日ほど続いたことで、自分自身の体力面と精神的に、ちょっとショックを受け、歳を重ねると今まで感じていた体力の衰えと、精神的なバランスの違う感覚を、日々に発見することが多くなりました。如何に体力・精神面の現状を維持することが大変であるかを痛感しながら、日々前向きに取り組むように挑戦するだけだな、と感じているこの頃です。

今回は、七月十九日（水）・二十日（木）に連休がありましたので、再度北アルプスへの登山も検討していましたが、さすがに一人での運転や交通費、予備日がないこと等を考えると、かなりきつい登山計画なるとも思っていた矢先、新聞の折り込み広告に、富士登山のバスツアーが載っているのが目に留まりました。

世界遺産登録後は登っていなかったのと、あと何度登れるかという思いが頭に過った瞬間の、「さあ行こう」との心の中の声に従って、予約を入れました。

行く三日ほど前から、当日と次の日の天気が、選りに選って台風の影響で、全国的に大雨の予報でした。

しかし、こればかりは仕方がないことなので、雨対策と高山での寒さ対策だけは十分に備えて、当日を迎えました。

朝七時二十分に、JR難波駅でバスに乗ると、途中、梅田、新大阪、京都の三箇所で、バスツアー参加者を乗せて出発すると、途中二回の休憩を入れて、富士宮市郊外にある「ホテル花の湯」に到着。そこで、着替えをして荷物を預け、ツアー客には弁当が配られ、富士登山ルートコースごとにシャトルバスに乗り換えて、いざ出発です。

私は今回、静岡県側にある富士宮ルートを選びましたが、富士宮登山口行バスに乗り込み、約一時間で富士宮登山口に到着しました。

「ホテル花の湯」への到着時間が、一時間ほど遅れて、着いたのが十六時前ということで、登山口には雨が降っているだろうことを予想し、カッパ準備で装備しました。

富士宮ルートのバスに乗り込んだのは三十名で、その中でガイド付きの人は九名で、私を含め、あとの人はフリープランです。ほとんどの人が富士登山は初めての人のようで、学生グループやアジア系外国人もいました。

私は一番前の席に座ったので、道中でのガイドさんと運転手の会話のやりとりが、よく聞こえてきました。内容は、ガイドさんが今年初めてツアー客を案内するとか、富士吉田口ルートと富士宮ルートの山小屋の接待が、吉田口は厳しいしシビアで、富士宮口の方が優しく接客する等、山梨県民と静岡県民の県民性の違い

などの話で、道中楽しませてもらいました。

その後、ガイドさんから、ツアー客に対しての登山中の確認事項、注意点の説明がなされていましたが、その間私は、富士宮口は吉田口と違って簡素で、土産物屋やレストランはないので、雨が降っていたら、休憩所すらもないので、弁当を何処で食べようか等と考えていましたら、しばらくして富士宮口の登山口に到着しました。幸い雨は止んだ様で、ホッとしました。

登山中の行動は、ツアー客以外は別行動でしたので、私は表口五合目の登山口にて、まず富士山保全協力金一〇〇〇円を支払った後、表口五合目を少し上がったところにある有料の公衆トイレに向かいました。ここで協力金二〇〇円を支払い、用を足しました。

この建物には屋根もあり、少し広いスペースもありましたので、ここで食事を済ませて、この日宿泊予定の、元祖七合目の山口山荘への登山の始まりです。

既に十七時二十分で、まずは新六合目の雲海荘へは、ほぼ平坦に近いゆるやかな登りで、十五分もしないうちに到着しました。

ガイドさんが、

「ろうそくを吹くように長い息をはくように、を常に意識して歩いて下さい。」

と説明されていたことが、私の意識の中にしみこんだように実践して歩きました。水分、塩分は早めに摂取し、新七合目、ご来光山荘へは少し急登でしたが、ゆっくりと歩きました。

十八時三十分ごろですが、時おり曇り空に青空も見られ、日暮れにはほど遠い感じでしたが、そこからこの日の宿泊の山口山荘には、十九時四十分の到着時には、すっかり日が暮れて、下界の富士宮市街の夜景も見えるなど、雨に降られることもなく、とてもラッキーだったと思います。

山荘に着くなり、山荘のスタッフから翌朝の出発時間を聞かれ、深夜〇時と伝えると、翌朝分の弁当を渡されて、宿泊部屋にて説明を受けました。消灯時間が二十時とのことで、急いで明日の準備と荷物整理をして、床に伏せました。

ツアー客やその他の方は、私より先には小屋に着いていなかったので、到着は消灯時間を過ぎることになるので、大変だなと思いながら寝るというか、深呼吸を意識して床に伏せっていると、自分では意識はあると思っていたのですが、気がつくとすでに二十三時二十分で、急いで準備をして外に出ました。

幸い雨も降っておらず、八合目の池田館に向かって、ヘッドライトを胸元と頭とリュックに着けて出発しました。すでに先行者がいたので、標識と先行者の灯りも頼りに、急登をゆっくりと歩いて行

いざ出発（富士宮口の五合目）

きました。

夜間歩行は、視線を上に上げることがあまりなく、ただただライトに照らされている目の前の灯りだけを意識するだけですので、余計なストレスも感じることなく集中できるので、私としてはペースだけを意識すればいいだけですので、返って楽に歩けます。

しかし、この日は風がものすごくて、私の身体が飛ばされるほどの強烈で、その風で背中から押してくれるのならありがたいのですが、前からも横からも吹いてくるうえに、急登ですから歩きにくく、そのあげく帽子の紐を引いてしっかり止めていたにも関わらず、前からの強風で帽子も吹き飛ばされるほどでした。

一時間ほど登って、池田館に到着しました。風と寒さで、すぐに出発しようと思うほどでしたが、見ると小屋のトイレの前に外国人がおり、スマホでビデオ通話をしていて、画面の相手と話しながら休憩を取っていたのですが、その人がなんとも軽装で、よく寒くないなあなどと思いながら、私はそのまま登山道を進んで、九合目の万年雪山荘へと向かい、また一時間ほど掛かって到着。そのまま風と寒さの中、次の九合五勺にある胸突山荘に向かいましたが、言葉通りに胸突八丁といわれる急登です。

九合目、万年雪山荘前でパチリ

そこからさらに、山頂に向かっての急登が続きましたが、途中は先行者の灯りも参考にしていましたので、そのまま真っ直ぐに進んで登って行きました。

途中、それまで見えていた後方の灯りが、全然見えなくなっていたので、どうやらルートを間違っていると気が付いたのですが、先行者の灯りが見えているし、上には剣が峰へのルートの安全柵が見えましたので、この先、山頂神社に登って剣が峰に行くにも少し時間も掛かりますし、お鉢巡りにも時間短縮、体力温存もできるから、これはラッキーだと思って、先行者の灯り付近を付いて山頂を目指すことにしました。

一応、少し戻って灯りを頼りにルートを確認したもののルートはなく、安全柵に向かうのは三十メールほども馬の背のような岩の上を行くか、その岩に沿って岩を掴んで三点確保しながら行くかしか思いつかず、三点確保しながら、三七五〇メートル近い空気の薄い急登のところを登りきりました。

途中は溶岩で、岩ももろく足下も溶岩でガレていて踏ん張りもきかず、内心「やばいな、滑落したらどうしようか」ということが頭を過りながらも、三点確保して登り切りました。

三時四十分ぐらいに、剣が峰に到着して休憩をしていたら、多くの後続の登山客が登ってきました。

登ったのが早かったせいか、私が登っ

富士山頂からのご来光（上）と雲海に浮かぶ影富士（下）

た時には、五～六人程しかいませんでしたが、さすがにご来光の時間には、七・八十人近い人がいたように思います。

雲海が広がっている中、天気は晴れており、ご来光は無事見ることができました。日本一高いところからご来光を見られたことに、何ともいえない至福の時間を味わえた気持ちです。雲海の中に、八ヶ岳連峰だけが見られたのも感動的でした。

その後、私はすぐに一時間ほどかけてお鉢を歩き、山頂山荘でココアを頼んで、そこで朝食をとり、そこからそのまま富士宮登山ルートで下山しました。

途中、九合五勺からの登りでルートを間違ったところを確認し、ゆっくりと登ってきた山小屋を通るたびに、こんな急登をよく登ってきたもんだ、と感じながら、九時前に昨日の五合目到着。

前日同様、トイレにて着替えを済ませ、荷物を整理して、十一時発の帰りのバスにて、荷物を預けている「ホテル花の湯」に到着。ここでは、ランチバイキングで食事をして入浴した後、バスは富士宮浅間神社に廻り、富士宮のグルメが集まる「お宮横町」で休憩。今はやりの「富士山ジェラート」を食べてバスに乗り込みました。

途中、新東名高速の静岡サービスエリア他、サービスエリアで何回かお土産休憩を取りましたが、バスを降りる度ごとに、お土産購入クーポン券を配る業者が待ち構えており、これも今はやりの、町おこし「コラボ計画」なんだろうなと思いつつ、一路帰阪の途につきました。

「急がば廻れ」という諺がありますが、富士山に登る途中に会った若い五人組グループが、何度も私を抜いて登っては休憩していましたが、その後まったく何処に行ったのか分かりませんでしたが、随分後に山荘に到着し、最終的には山頂にも行けなかったといってました。

その点、今回私は、登山前のガイドさんがいってくれた、

「ろうそくを吹くようにゆっくりと息を吐いて下さい」

を実践したのが功を奏したような気がしています。

お陰で頭痛もなく、ほとんど筋肉痛もなかったことに感謝、感謝です。

恵日だより

盂蘭盆会法要

八月十三・十五日　午後一時

献膳をされるご住職（盂蘭盆会）

八月八日の立秋になっても猛暑は収まるどころか、連日熱中症警戒アラートが出されているような状態で、一向に収まる気配がない日々でしたが、昨年までコロナの影響で地区別に奉修していた盂蘭盆会も、本年より元の通りの十五日の奉修に戻しての奉修でした。

しかし、大型台風が六号・七号と、立て続けに発生し、特に七号が十五日のお盆の日に関西に直撃して上陸するとの予報が出たことで、それを見越して、今年は十三日のお講に盂蘭盆会のお参りをする人が多かったようです。

また、法要当日の朝、急遽、法華講の連絡網を通じて、台風のため今日は無理をして参詣されないように、明日十六日も午後一時よりお盆の御経を奉修されますとの旨が伝えられ、十六日にも法要が奉修されることになりました。

十五日の法要は、早朝に潮岬に台風が上陸すると北上し、ちょうど盂蘭盆会の法要が始まる頃に大阪方面に来襲したようで、大雨と強風の警報が出る中での奉修となりました。

午後一時に出仕鈴が鳴り響く中、ご住職が出仕され、献膳、読経と如法に進められ、寿量品に入ってご住職のご焼香が行われると、参詣者が順に焼香台へと進み、全員がお焼香をし、ご住職により懇ろにご回向がなされ、お題目三唱の後、「上野殿御返事」他、三通の御消息を通してご住職より講話があり、法要は終了しました。

また、雨と風のため三師塔前での読経唱題は行われませんでした。

また、これに先立ち、昨年まで中止と

ご先祖を偲び焼香をされる参詣者（盂蘭盆会）

なっておりました、各家庭にお参りしてのお盆の棚経も、今年から再開され、初盆の方を含め、申し込みのあった各家庭にお参りして、読経唱題、各家諸精霊の追善回向も奉修されました。

案内・お知らせ

＊御難会のご案内

九月十日（日）、同十三日（火）の両日、午後一時より、御講にあわせて、源立寺本堂において御難会が奉修されます。

御難会は、「大難四ヶ度」といわれる数々の難に値われた大聖人の御一代においても、頸の座という身命に及ぶ最大の難である、文永八年九月十二日に起こった竜口法難を期して、宗祖日蓮大聖人が発迹顕本されたことを、ご報恩申し上げる法要です。

講員各位には、参詣下さいますよう、ご案内申し上げます。

＊秋季彼岸会のご案内

九月二十三日（土）、午後一時より、源立寺本堂において、秋季彼岸会が奉修されます。講員各位には、ご参詣下さいますよう、ご案内申し上げます。

なお、お彼岸の御塔婆の申し込みは、なるべく早めにお願いします。当日のお申し込みの場合は、法要に間に合わない場合がありますので、ご注意願います。

【長月詠草】

「ただいま」と　言ふが早いか　食事請ふ
ソフトの練習　終えし娘は
〔和　風〕

亡き父の　部下を迎ふる　彼岸なり
姑いそ〳〵と　栗茹ではじむ
【恵日俳壇】

早三日獲物きたらず袋蜘蛛
新米のどさり積まれて村を出づ
〔農　婦〕

富士日の出待つ青白き雲海に
雲海にうかぶ日天祈りけり
雲海に昇る朝日に歓喜の声
〔森　秀之〕

七夕の竹満載しトラック着く
町の端を真直ぐよぎる梅雨の川
〔故　吉田　裕〕

恵日　九月号　通巻三四四号　令和五年九月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）年間二〇〇〇円

九月の行事

一日（金）　午後二時　お経日

三日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会

十日（日）　午後一時　お講・御難会・役員会

十三日（水）　午後一時　お講

二十三日（土）　午後一時　秋季彼岸会

※十月号の継命・恵日発送（9月末）は、
『北摂』地区が担当です。
十一月号の継命・恵日発送（10月末）は
『豊能』地区が担当です。

❖恵日ホームページ活用を❖

昨年、『恵日』のホームページが開設されました。このホームページでは、『恵日』創刊（平成七年三月号）から現在に到るまでの全号が、年代別に分類・収録されており、いつでも自由に閲覧できます。

また、菅野ご住職の著書・著作や、正信覚醒運動に関する重要な諸資料等も多数収録されていますので、講員各位におかれましては、ぜひともホームページをご活用いただきますようご案内いたします。

恵日ホームページのアドレスは左の通りです。

https://the-enichi.co/

恵日
令和五年九月号　通巻三四四号
令和五年九月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
℡（〇七二）七五一―三一三五
E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料（含送料）年間二〇〇〇円
〒振替　加入者名　恵日編集室会計
口座番号　01380-2-12649